巻頭言

院長　宮坂宥洪

釈尊は二十九歳で出家し、六年間の修行の後、三十五歳で悟りを開かれたという、所謂「二十九出家三十五成道」説は主に南伝仏教系の伝承であり、一方、釈尊は十九歳で出家し、数えの十二年間の修行の後、三十歳で悟りを開かれたという、所謂「十九出家三十成道」説は主に北伝仏教系の伝承であった。明治期に近代仏教学が前者の南伝を採用して以降、今ではそれが常識となって定着し、後者は全く顧みられることがなくなった。

しかし、試みに「ＳＡＴ大正新脩大藏經テキストデータベース二〇一八年版」で検索すると、「二十九出家三十五成道」は計十二巻に用例があり、出現回数二十六件であるのに対して、「十九出家三十成道」は計三十一巻に用例があり、出現回数五十件であり、漢語の仏典における用例の巻数も出現回数も後者のほうが断然多い。

ここでどちらが正しいかという議論をするつもりはない。二千五百年以上も前のことを検証するすべはありようもないことである。問題は、釈尊の出家と成道に関して、古くインドの部派の時代から二つの説があり、それが共に伝承されてきたという事実があり、わが国では仏教伝来以来、明治期に近代仏教学が始まるまで、北伝仏教系の「十九出家三十成道」説が主流であったことを看過すべきではないということである。

弘法大師空海（以下、大師）は、二十四歳のときに著した『聾瞽指帰』に「夫れ吾が師、釈尊、本願尤も深くして八十の權を現じ、慈愍極り難くして三十の化を示す」と記している。「三十の化を示す」とは、三十歳で成道して人々を導いた、の意である。大師は北伝の「十九出家三十成道」説を当然視していた。大師は同書に「未だ思う所に就かざるに忽ちに三八の春秋を経たり」と記す。「三八」とは大師自身の二十四歳のことだが、「思う所」とは、三十成道という目標に違いない。釈尊を「吾が師」と仰ぐ大師は自らが十九歳になったとき、釈尊のように世を出る決意をした。そして、釈尊のように三十成道を目指したのである。

十八歳で大学に入った大師がなぜ一年かそこらで退学したのか、そして二十四歳のときに『聾瞽指帰』を書き

上げてから、延暦二十三年（八〇四）七月六日に肥前国松浦郡田浦を出帆した第十六次遣唐使船に留学僧として乗る三十一歳までの消息が全く不明なのも宜なるかなである。

受戒と得度または出家の年代と日付、その時々の年齢に関して、『御遺告』を始め、『続日本後記』の卒伝、さらには諸種の太政官符、受戒した際の戒牒文などの多くの伝記の諸資料は、あきれるほど一致しない。伝承の過程で誤記や誤写があったとしても、その最大の原因は、大師が自らこのこと（俗に「空白の七年」という）について黙して語らなかったということに尽きる。それはそれで尊重すべきことなのかもしれない。

大師が第十六次遣唐使船に乗ることが出来たのは、全くの僥倖だったのだろうか。それとも、大師は入唐にそなえて周到な準備を重ねてきた末に、満を持して、乗るべくして乗船したということなのであろうか。

当初の第十六次遣唐使船は、延暦二十二年（八〇三）四月十六日に難波津を出帆した。だが、数日後に瀬戸内海で暴風雨に遭い、船が破損し、多くの人が溺れた。大使の藤原葛野麻呂は帰京したが、伝教大師最澄が乗っていた第二船は無事九州に到着して、上人はそこで一年延期された遣唐使船を待つことになる。

この、当初の第十六次遣唐使船に大師は乗っていないことになっている。すると、この船が無事航海して大陸に辿り着いていたら、大師の歴史舞台への登場はまた別のかたちになっていたであろう。だが、もし大師が入唐にそなえて周到な準備を重ねてきたとするならば、この船に乗っていなかったはずがないと思うのである。

入唐後の大師は、偶々漂流して辿り着いた福建あたりの現地人とも会話に困らなかったし、恵果阿闍梨から伝授を受けるに当たって、中国語は当然、悉曇の読み書きも自由にできた。長安に着いて最初に師事した醴泉寺のインド僧の般若三蔵から梵語で教わり、新訳経典を授与されるほどの語学力をも身につけていた。それに大師が請来した経典は、それまで日本にもたらされた膨大な経典と一つも重複していない。

本来なら異邦の一介の留学僧が、インド密教の法灯を伝える大唐帝国の国師たる恵果阿闍梨に会えるすべはない。それが会えたどころか、いきなり満面に笑みを浮かべて恵果阿闍梨が発した言葉が、「われ先きより、汝の来たれるを知り、相待つこと久し。今日、相まみゆるは大いに好し、大いに好し」であった。そして恵果阿闍梨は一千人余の弟子をさしおいて大師に、すぐさま灌頂を授け、みずからの後継者とした。

大師にとって「三十成道」とは、このような正統密教の後継者となる資格を見据えたものではなかったか。

インターネットの百科事典『ウィキペディア』の「空海」の項に、「遣唐使が遭難し来年も遣唐使が派遣されることを知ったとされる、入唐直前三十一歳の延暦二十三年（八〇四年）に東大寺戒壇院で得度受戒したという説が有力視されている。太政官符では延暦二十三年（八〇四年）四月七日出家したと記載する」とある。留学僧に選ばれるためには東大寺で受戒して正式な僧になっていなければならなかったから、このような「説」が生まれたのであろうが、当時は年分度の制約があったから誰でも望んですぐに得度できるものではなかったし、得度してもすぐに具足戒を受けることはできなかった。また受戒後、戒壇院に留まって三ヶ月間は修学する規定があったから、入唐の直前に得度・受戒したということはありえない。

大師のご生涯は凡俗の想像を超えて本当に謎につつまれているのである。よく、史実と伝説を区別しなければならないといわれることがあるが、私たちが史実と思い込んでいるものも、現代の伝説の一つと言いきれないこともない。

近代になって、それまで散逸していた大師の諸著作を初めて集成し編纂したのが、明治四十三年発行の長谷宝秀師による『弘法大師全集』であった。現在は、これに校訂を加えた『定本弘法大師全集』が高野山大学密教文化研究所から発行されている。

真言宗智山派では、昭和五十九年の弘法大師御遠忌一一五〇年の奉修事業として、『弘法大師空海全集』（全八巻）を筑摩書房から発刊した。

今般、真言宗智山派では、令和五年に正当する宗祖弘法大師ご誕生千二百五十年の慶讃事業として、智山版『十巻章』（本文編・訓読編）を、智山伝法院研究職の総力を挙げて出版した。画期的な研究成果と自負しうるものである。本誌には、総合研究論文（特集「十巻章」）として、小林靖典氏、山本隆信氏、元山公寿氏、小宮俊海氏に、その編纂過程で問題となった事柄を論述していただいた次第である。